

EASD2018参加記

2018年10月1日～5日
Berlin, Germany

山田 朋英

Tomohide Yamada

東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科 助教

はじめに

第54回欧州糖尿病学会(European Association for the Study of Diabetes; EASD)が、2018年10月1日～5日にドイツ、ベルリンで開催され本学会に参加してきましたのでご報告します。ベルリンは糖尿病学の歴史において重要な場所です。たとえば、ドイツの病理学者であるパウル・ランゲルハンス(Paul Langerhans)は1847年にベルリンで生まれました。1869年にランゲルハンスは「膵臓の顕微鏡的解剖」というタイトルの博士論文を発表し、この中で膵臓の至る所にみられ、周辺の細胞とは異なった染まり方をする明るい細胞から構成される島について言及しました。これが後に、インスリンやグルカゴンなどを産生する膵臓の細胞塊であることが明らかとなり、ランゲルハンス島と呼ばれるようになることは良く知られるところです。他にも、Rudolf Virchow(細胞病理学の基礎を確立)、Robert Koch(コッホの原則)、Otto Heubner(ドイツ小児科学の父)、Max Rubner(ルブナー指数)、Rahel Hirsch(女性として初の教授に就任)らはドイツの著名な研究者です。EASDは、彼ら・彼女らの偉業を称え、講演が行われるホールには彼らの名前がつけられていました(例; Langerhans Hall)。

本年は2,038演題が登録され、40人のレビュアーによる査読を経て1,218演題が採択されました。演題採択率はこの10年の間、ほぼ同じ(50～60%)とのことで

す。また過去3年間で毎回15,000人以上が参加しています。日本糖尿病学会の年次学術集会の参加者も約15,000人、米国糖尿病学会の参加者が約12,000人であることから、いかに日本糖尿病学会の参加者が多いかがわかります。

EASDが目指すもの

学会 初日に、EASD PresidentであるJuleen Zierath先生による開会の挨拶がありました。Zierath先生は、本学会の特色は、未来を見据えた最先端の基礎・臨床研究の成果を報告する場であると同時に、現場の経験に基づく医療者の臨床、ケア、教育に関する発表を重視していることを強調されていました。また、国際協力体制の強化を目標に挙げており、その1つの例として、日本糖尿病学会との交換留学プログラムであるJDS and EFSD Reciprocal Travel Research Fellowship Programmeについても積極的に応募して欲しいということを宣伝されておりました。この助成プログラムは糖尿病分野における共同研究の促進を目的とし、欧州研究機関への日本の研究者の派遣および欧州地域の研究者の日本研究機関への派遣に対し研究費(上限500万円)などを助成するものです。さらにEASDは研究資金の拡充を進め、現在年に100万€(約1.3億円)の研究資金を提供しているとのことでした。またWebcastのサービスにより、学会に参加しなくても、